読後雑感 アジア編 ： 2013年 第10回

16. JUL. 13

ミャンマー：少数民族特集

小島正憲

1.「ミャンマー政治の実像」　2.「北ビルマ、いのちの根をたずねて」
3.「ミャンマー　いま、いちばん知りたい国」　　4.「ミャンマー　東西南北・辺境の旅」

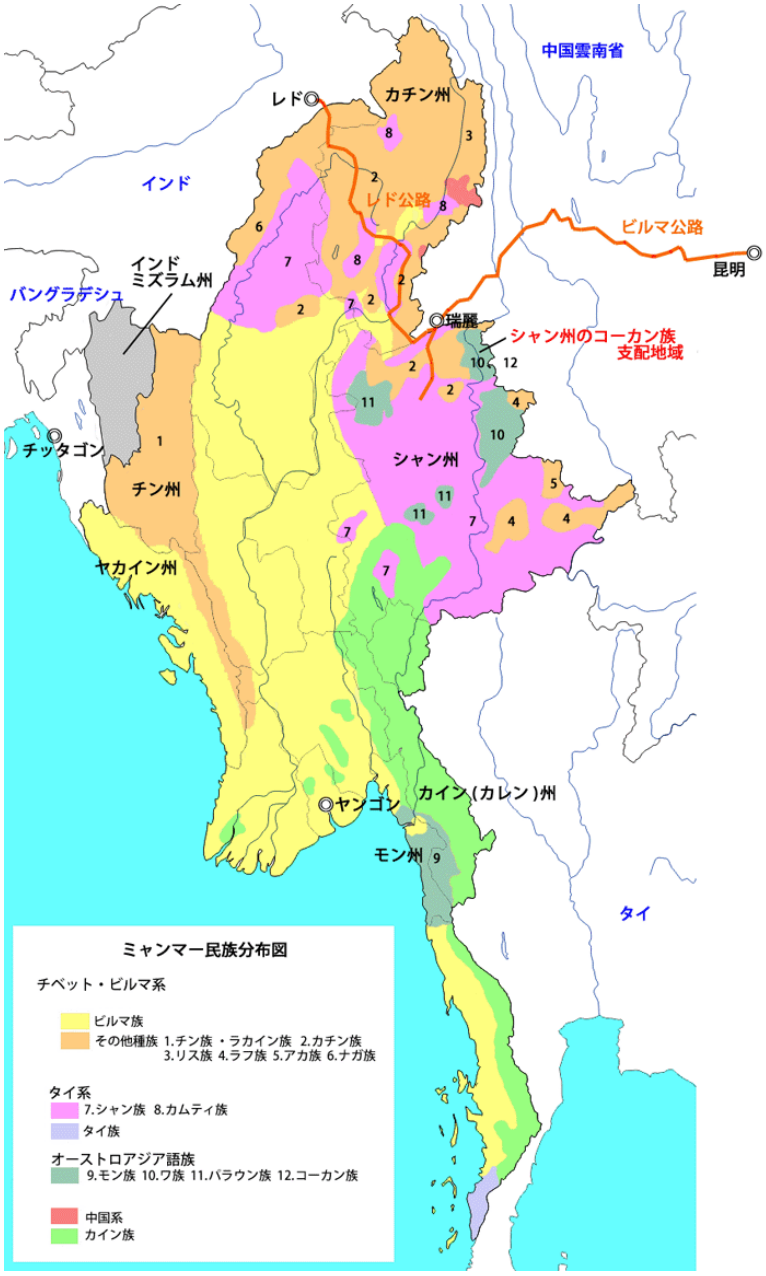
これらの本を読むと、ミャンマーの少数民族問題は、イギリス・日本・中国・インド・パキスタン・アメリカ・タイなどの大国や隣国の干渉の結果であり、ミャンマーの少数民族はそれらの大国に翻弄された犠牲者であったということがよく理解できる。

1.「ミャンマー政治の実像」　工藤年博編　アジア経済研究所　2012年3月14日

副題 ：「軍政23年の功罪と新政権のゆくえ」

この本は、現在のミャンマーを理解する上で、大いに参考になる書である。ことに第4・5章は少数民族問題の理解のために、絶好の書であると思う。

第4章では、タイ国境沿いに生きる少数民族が、タイの政策の変化に翻弄される経過を書いている。



・1970年代までに、タイ国境沿いでは少数民族グループが民族民主戦線を組織し、西側よりの反共主義を掲げた。冷戦中、タイと米国政府はミャンマーが共産主義化するのではと危惧し、少数民族グループを秘かに支援していた。その結果、1980年代終わりには、タイ国境沿いのほとんどすべての領土が、民族民主戦線のモン族、カレン族、カレンニー族、シャン族の反政府武装グループによって事実上支配されていた。

・しかし冷戦が終了すると、タイ政府は「共産主義の脅威は去った」と公言し、「インドシナを戦場から市場へ」という新政策に転換した。タイは隣国との関係を正常化し、貿易と投資を推進しようとした。タイ政府にとって国境沿いの少数民族勢力はもはや無用となった。彼らが形成する解放地域は緩衝地帯ではなく、広域経済圏の形成に対する障害とみなされるようになった。タイ国境沿いの戦闘は、ミャンマー領海の天然ガス田からタイまでパイプラインを建設する上で障害となっており、さらにダウェイの深海港や、貿易を促進するためにタイと結ぶ道路など、ほかの大規模開発プロジェクトの妨げになった。

・1993年、タイ政府は、モン、カレン、カレンニーの各軍に対し、軍事政権と停戦するように圧力をかけた。

・1994年、タイ国境沿いの最大の少数民族組織：カレン民族同盟（KNU）は、軍事政権との個別協議に入るように求めるタイの圧力に抗していたが、内部紛争が

引き金となって、マナブロウ司令部がミャンマー国軍に攻められ陥落した。
さらにキリスト教徒幹部に対する不満から、仏教徒が KNU を離反し、民主カレン仏教徒軍（DKBA）を組織するに至った。ミャンマー国軍は、この機会をとらえて、DKBA への支援と領土の支配権を与える見返りに、DKBA に対し停戦を迫った。

・1995～97年にかけて、ミャンマー国軍は弱体化した KNU を攻め、領土の大半を占拠した。KNU はゲリラ化した。
・1995年6月、モン族はミャンマー国軍との停戦協定を結んだ。

第5章では、中緬国境沿いに生きる少数民族が、中国とミャンマーとの力関係を直接受け、大きく翻弄される様子を詳細に書いている。この章を読めば、この地域のビルマ共産党・中国共産党政府・ミャンマー政府の三角関係を中心にした歴史の経緯がよく理解できるし、複雑な現在の少数民族問題を明確に整理できる。以下に、本書に沿ってそれをまとめておく。

・1939年、ビルマ共産党（CPB）結成。その後、地下活動に入る。
・1949～50年、中国人民解放軍に追われた中国国民党軍の残党が、ミャンマーのシャン高原（ゴールデン・トライアングル）へ逃げて、台湾の国民党政府と米国からの支援を受けながら、大陸反攻を企てる。
・1950後半～60年代初期、CPB、ミャンマー国軍の掃討作戦に敗れ、バゴー山地の部隊壊滅、一部は中国領内に逃れた。ミャンマー領内に残った CPB 部隊の一部は、シャン州北東部のコーカン族・ワ族が居住する中緬国境地域を根拠地として、両国間の密輸などに携わり、反政府活動を続けた。
・1960年、中国の周恩来首相との間で、「領土主権の尊重、相互不可侵、…」の「平和五原則」確認。中緬両国、国境条約締結。
・1960～61年、ミャンマー国軍、中国人民解放軍との共同作戦で、国民党残存勢力を掃討。
・1960半ば～76年、中国の文化大革命の影響を受け、CPB 内にも紅衛兵が組織され党内の粛清が始まり、ビルマ族幹部の大半が消え、CPB 指導部は少数民族出身の兵士たちによって構成されるようになった。
・1967年、ミャンマーにおける反文革・反中国闘争の高まりを受け、中国政府が CPB 指示を打ち出す。中国による兵器などの支援を受けた CPB 部隊や中国の義勇兵は、ミャンマー北部に侵入し、そこを支配地とした。CPB は1975年前後に最盛期を迎え、そのときの勢力範囲は、サルウィン河から中緬国境まで10万平方キロにわたり、域内の人口は150～200万人に及び部隊の規模も3万人にふくらんだ。
・1976年、毛沢東死去、中国で文革終焉。鄧小平、「改革・開放政策」に転換し、ミャンマーとの関係を重視。CPB、中国から資金・兵器支援などの道を断たれ、危機に直面。CPB、アヘン栽培・密売に資金源を依存。その結果、組織内の力関係はコーカン族・ワ族などの若者に有利となり、組織内に腐敗・堕落が蔓延。
・1987年、ミャンマー国軍、中国の暗黙の了解のもと、CPB 支配地域を攻撃、奪還。
・1988年、民主化闘争を武力で鎮圧したミャンマー軍政は、欧米からの制裁を受け、中国などの近隣諸国との関係改善を模索。
・1989年、天安門事件以後、欧米諸国から制裁をうけることになった中国は、ミャンマーを含む周辺諸国との関係改善を模索。中国共産党は CPB に対する支援を全面的に中止し、ミャンマー軍政と手を結ぶ。コーカン族・ワ族など次々とミャンマー軍政と和解、CPB 離脱を宣言。CPB 崩壊、4大少数民族軍誕生（MNDAA＝ミャンマー民族民主同盟軍＝コーカン族）、（USWA＝統一ワ州軍＝ワ族）、（ESSA＝東シャン州軍＝シャン族・アカ族）、（NDAK＝カチン新民主軍＝カチン族）。
・1989年から、ミャンマー軍政側が、反政府活動に参加しないことを条件に、少数民族勢力と和解工作を開始。4大少数民族勢力は、ミャンマー軍政と停戦協定を結び、軍政にその支配地域を特区として認めさせた。その結果、少数民族地域は、国家の中の国家あるいは地方政権のようになった。
・1990年代初期、4大少数民族勢力は、その武力と財政を維持するため、簡単に資金を入手できる麻薬ビジネスを盛んに行うことになった。ミャンマー軍政は国際社会の強い要請を受け、麻薬撲滅の計画を明らかにし、その後、中緬両国政府や国際団体は麻薬代替商品作物栽培の支援と協力を強化した。
・1993年、この麻薬代替商品作物栽培では、とても麻薬ビジネスによる莫大な収入を補填できず、4大少数民族勢力は麻薬ビジネスに代わるものとして、カジノ建設を始めた。もちろん利用客は中国人で、国境地帯にカジノが林立することになり、最大時では83個所を数えるようこととなった。その後、4大少数民族勢力では、ギャンブルによるマネーロンダリング、その他拉致、拷問、殺人などの越境犯罪が多発し、2005年からは、中緬両国政府の圧力で表向きはカジノが営業停止に追い込まれた。ただし中緬国境地帯では、カジノが秘かに経営され続けている。
・ビルマ族が大半を占めるミャンマー軍政と各少数民族との隔たりおよび矛盾は、依然として緩和されていない。少数民族の勢力は、自民族の権益を守るため、「武力を擁して自立し、領地を支配して自己管理する」政策を堅持し、武力を安易に放棄しなかった。そのため、これらの少数民族勢力を災いの元とみなしているミャンマー軍政は、4大

少数民族勢力と信頼関係を構築したわけではなく、双方は、支配地域をめぐって現在も争いを続けている。

・2009年初め、ミャンマー軍政は、国軍以外の独立した軍隊を禁じる新憲法の規定に従い、各少数民族勢力に対し、特区の自治組織を政党化し総選挙に参加して、新憲法の発効前にそれぞれの武力を国境警備隊または地方の準軍隊としてミャンマー国軍の指揮下に入ることを要求した。これに対して4大少数民族勢力のうち、USWA、ESSA、NDAK の3者は、国軍側に侵攻の口実を与えないため、武力を保持したまま、あえて公然と対抗する姿勢をとらず、交渉の用意があるという態度を示している。ただし MNDAA＝コーカン族だけは、軍政の要求をきっぱり断った。

・2009年8～9月、ミャンマー軍政側は、MNDAA の軍が1500人と少人数であり、しかも内紛によって指導部が弱体化していることを考慮して、コーカン地域に攻め入った。その結果、4万人近くのコーカン族が戦火を逃れて中国領に逃げ込んだ。武力衝突は MNDAA の敗北に終わり、指導者彭家声が行方不明となり、MNDAA 軍は国境警備隊へ編入された。他の3大少数民族勢力は強大であり互いに結束し、ミャンマー軍政に抵抗しつつ、交渉の糸口を探るという和戦両様の構えをとっている。

・中国政府は、国境近辺での騒乱は好ましいものではなく、ことにカチン州を通る石油・天然ガスパイプラインプロジェクトやミッソンダムなどの投資にとって、少数民族との協力が不可欠であることから、ミャンマー軍政に少数民族問題の解決を迫ったり、その仲介役を務めたりしている。

・かつてミャンマー軍政は、内政を安定させ、かつミャンマー民主化勢力と少数民族武装勢力という双方の敵に直面する状況から脱却するために、「停戦」という臨時の措置を取らざるを得なかった。現在も、旧 CPB から独立した少数民族問題を解決し、これを持ってミャンマーの再統合と民族融合に繋げていくためには、中国の協力と内政不干渉を必要としている。

・現状況下において、ミャンマー軍政は民主化を進め、欧米各国の支持を取り付けることによって、中国への牽制とし、同時に中国の協力を取り付けながら、少数民族の勢力を削ぐというしたたかな戦略を取っている。しかしこれは絶妙なバランスを必要としており、まさに綱渡りのような戦略でもある。ここにミャンマーの少数民族問題の難しさが存在している。

2.「北ビルマ、いのちの根をたずねて」　吉田敏浩著　めこん　2000年3月22日

帯の言葉 ：「“死はなにも特異なことではない。すべての草木もいつかは死ぬのだから“”しかし死を軽んじることは許されない 」

私は戦場ジャーナリストの吉田敏浩氏の書いたこの本を読んで、ミャンマーの抱える少数民族問題の複雑さを、再認識させられた。それはイギリス、日本、中国、インド、パキスタンなどの大国や隣国のエゴにより翻弄された結果であり、その歴史は民族相互間の憎悪や怨念を解決することが、まったく不可能なことのように思わせる。以下にその経過を、吉田氏の本文から引用し紹介する。

なお、ビルマ共産党とカチン独立軍との闘いなどの紹介部分は、上掲著と重複するが、ほぼ同一内容であるということを確認してもらうために、あえて記しておいた。東パキスタン軍とミゾ民族戦線との闘いなどは、私もこの本で始めて深い内容を知ることができた。

この書からは、ミャンマー西北部に住むチン族が、インド・パキスタンの両国に翻弄される様子を窺い知ることができる。ミャンマーの西北部に住むチン族は、インドの国境地域ミゾラム州に拠点を据え、チン民族戦線を結成してゲリラ活動をしていた。このミゾラム州では、同じくチン族がインドからの独立を目指すミゾ民族戦線がインド政府と戦火を交えていた。古くから自立した暮らしを送っていた山奥の民が、イギリスの植民地支配下におかれて英領インドの枠組みに囲い込まれ、さらにその領土を受け継ぎ独立したインドという国家に組み入れられて「少数民族」の境遇を強いられたことが、両国での内戦の根本的な原因であった。つまりビルマからの独立を目指すチン民族戦線とインドからの独立を目指すミゾ民族戦線は、もともと同一民族でありながら、歴史に翻弄され、別々の国家との独立闘争を強いられることになったわけである。ことにミゾ民族戦線の場合は、2重に歴史に翻弄された。ミゾ民族戦線は1968年ごろ、東パキスタン（現在のバングラデシュ）の国境地帯にパキスタン政府軍の支援のもと、軍事拠点を設けた。パキスタン政府にとってみれば、この地で反インド政府ゲリラを支援することは、インドとの対抗上、戦略的に重要な意味を持っていた。ところが1970年、地元のベンガル人イスラム教徒がパキスタンからの独立運動を始めた。インド軍の支援を受けたベンガル人はパキスタン軍を打ち破り、バングラデシュとして独立することとなった。1972年12月、パキスタン軍の降伏によって戦争は終わり、支援者パキスタンと軍事拠点を失ったミゾ民族戦線は、ミャンマーのラカイン州の森へと移り、ラカイン共産党ゲリラと協力関係を結んで、ビルマ政府軍とも戦わざるを得なくなった。

従来私は、バングラデシュのチッタゴン北方の丘陵で、少数民族が独立運動を行っており、この付近一帯が危険地域になっていることを知っていたが、その原因が上記であることは知らなかった。今さらながら、大国のエゴに引きずり回された少数民族の歴史に驚愕するばかりである。

イギリスの分割統治政策は、ビルマ族と他の少数民族の決定的対立を招いた。ことにキリスト教徒が主体であったカレ

ン族は軍隊や警察に積極的に登用され、ビルマ族を迫害した。第2次大戦勃発後、独立運動を率いるアウン・サンらは、日本軍に支援されてイギリス軍と戦った。そのときカレン族は連合国側に協力的だったとして、カレン村民が虐殺されるという事件が起きた。その後アウン・サンは日本軍が不利になると連合軍側に寝返って対日蜂起をする。アウン・サンはビルマ人、シャン人、カチン人、チン人と協定を結び、ビルマ連邦の独立を達成する。ただしこのとき、カレン人、カレニ人、パオ人、モン人などは、協定に参加せずあくまで自らの民族の独立を目指した。アウン・サン暗殺後、政府軍がカレンの村民を虐殺するなどの行為に出たため、諸民族も武力闘争に入り、ビルマは内戦状態に陥った。諸民族側は各地の都市を掌握し、政府軍を首都近郊まで追い詰めたが、米英に支援された政府軍に押し戻され、農村部でゲリラ活動をせざるを得ない状況となった。本書では書かれていないが、その後、ミャンマー北部には、中国の国共内戦で敗れた国民党の残党が入り込み蠢動し、またカレン族とビルマ政府軍の戦いが峻烈を極めた。

さらに中国の文化大革命時には毛沢東思想をかかげるビルマ共産党が、労農階級の国際連帯を旗印にして、東南アジア各国の共産主義革命を目指し、シャン州北部でゲリラ活動を展開した。共産党軍はビルマ政府軍と戦う一方で、カチン人など少数民族の組織に対しても圧力をかけ、親共産党派を作って組織を分裂させるなどの政治工作を行った。その結果、カチン独立軍は、政府軍と共産党軍の両方を敵に回して戦わねばならなくなった。本文中には、その戦闘の様子が詳しく描かれている。なお、ビルマ共産党の幹部はビルマ人で占められており、実戦部隊は主に、シャン州に住む中国系のコーカン人、ワ人、カチン人、雲南省からの中国人、インドネシアやタイからの共産党員であり、中国製兵器を備えていたという。やがて中国が鄧小平の改革開放時代に入ると、中国からの支援が減り、ビルマ共産党組織は弱体化し、内部分裂、崩壊の道をたどった。その後、コーカン族やワ族出身者を中心とする軍事組織を結成したが、ミャンマー政府軍の猛攻を受け、再び内部分裂し、親政府勢力が台頭し、表向きは政府に帰順した。2009年にはコーカン地域で政府軍との衝突が起き、多くのコーカン族住民が中国領に逃げ込むという事件も起きている。

3.「ミャンマー　いま、いちばん知りたい国」　中村羊一郎著　東京新聞　2013年3月27日

帯の言葉　：「ミャンマーのいまを深く知るために」

この本は、ミャンマー経済を知るためのガイドブックではなく、ミャンマーの観光ガイドブックの類である。それでも一般外国人では入ることができないような辺境の地に、著者は茶葉研究家としての肩書きを利用して足を踏み入れ、その現状を紹介しており、興味深い記述も多い。たとえば著者は、「**カチン州のミッチーナーからバモーを経て中国国境のムーセに通じる道が、第2次大戦中に英米が蒋介石の国民党援助のために建設したいわゆるレド公路の一部をなす。インドから延々と中国につながるこの道沿い……**」と書き、その近辺の実情を描き出している。著者がこの地域を調査したのは4年ほど前のことだが、最近になって中国がこの道路を再開発しバングラデシュ経由でインドのコルカタへ進出しようとしているというから歴史はおもしろい。また著者が踏破したカチン州のミッソンダム周辺は外国人の立ち入りを禁止しているし、ラカイン州には夜間外出禁止令が出されている。その意味で、著者の報告は貴重なものだが、惜しいことにはその報告には深みがない。せっかく少数民族地域に立ち入っているのだから、民主化後のミャンマーの未来を予想できるような記述が少しでもあれば、この本の評価はまったく変わったものになっていただろう。またこの本で描かれている大半の部分が、第2次大戦中の日本軍の行動範囲であり、それを意識的に追求し、掘り下げて紹介していれば、それなりの評価を受けることができただろう。残念なことである。

4.「ミャンマー　東西南北・辺境の旅」　伊藤京子著　めこん　2002年11月13日

帯の言葉　：「豊かなる静謐　ヤンゴン、チャイティヨー、インレー、タウンジー、モーラーミャイン、チャイントン、マンダレー、バガン、ミッチーナー、ガパリ、ミャンマー全土を行く　」

この本も旅行ガイドブックの類である。私はこの本の題名が、「東西南北・辺境の旅」であったので、きっとミャンマーの辺境の地、つまり少数民族地域の情報が満載なのだろうと思い、読み込んでみたが、それは見事に裏切られた。むしろ上掲書の方が、少数民族に関する情報がはるかに多い。それでも旅行ガイドブックとして割り切って読めば、それなりに楽しめる本ではある。

以上